

追悼・柳光観

琉球美人画の画家柳光観（やなぎ・こうかん）が世を去った。かんな絵師の八十歳の生涯だった。

柳光観（本名・伊佐清吉）は大正元年（一九一二年）に首里に生まれ、戦前の京都熊野美術学校で日本画を学ぶ。有名な川端龍子や小島藩三郎、樋口富麻呂らに師事し、日本の古典的な大和絵の技法を沖縄にもち帰った。



故・柳光観さん

戦後間もないころからか

き続け、その数は二百点とも三百点ともいわれている。

一時は初期の沖縄にも山田真山や金城安太郎らとともに出品し、日本画による琉球の美の世界を披

露した。豊かとは言いがたい時代に、流麗な琉球美人画は人々の心をなごませ、自信と誇りと呼び戻し

たことであろう。

（しかし当時の沖縄画壇は洋画（油絵）の作家が圧倒的に多く、静かに身を引くように展示会から姿を消していた。

その後はアウトサイダーの姿勢をくさず地味な制作活動を続け、数多くの名作を残している。

光観の絵は知る人ぞ知るで、人気が高く、かき上げた作品はほとんど売れていったという。まさに一世を風びし

た画家だった。

山原桃を入れたバーキを頭上のにせ、素足にバサーの娘がはるかかなたを見つめている絵であった。ていねいに仕上げられ、ゆるやかにふくらみを持った線で

絵など風俗画の作品も数多く手がけている。

四年前、一九八八年に開かれた画廊沖縄での個展は私の個人的な思い込みもあったが、それ以上に光観芸術のすばらしさを今一度見てみたい、見て頂きたいという念があったことも事実である。展示した作品はほとんど人手に渡ったので、作家自身の手持ちはほんの数枚だけであった。そのころからも光観の絵に人気があったことが知れよう。しかしその個展が光観の最初で最後の個展になることは、複雑な思いにかられる。そしてまた、これだけの芸術家がなぜこれまでに一度も個展を開かなかったのか、不思議な作家像に包まれる。

かかれた立像だった。味わい深く、気品に満ちあふれ、しばし柳芸術の奥深さに酔いしれ、興奮した一日を過ごした。

古きよき時代の豊かさを一枚の絵に込めて、後世に伝え残してくれた芸術家・柳光観に感謝するとともに、ごめい福を祈って筆をおく。

（上原誠勇・画廊沖縄代表者）

琉球美人画で一世を風び



柳光観の「桃売アングウ」